

中屋先生とアメリカ科の思い出

第15期 浜 貴也 (1967年卒業)

私が中屋健一先生のアメリカ科に進学したのは、1964年の秋であった。もともと理科二類に入学し、子供の頃から天文や宇宙科学に興味があった私は、出来れば理学部地物科あたりに進学したいと思っていた。しかし理二の教養課程では、生物、化学等の実験が多く、薄暗い実験室でホルマリン漬けの、硬直して体型が見苦しくゆがんだ大きなガマガエルを、何匹も解剖させられたり、棚に並んでいる試験管やフラスコに入った、苛性ソーダや希硫酸の鼻につく臭いを毎日かがされたりしているうち、次第に理系への進学に自信がなくなってきた。

その頃、駒場休講のあい間によく通った渋谷の東急名画座で見た、エリア・カザン監督の「アメリカ アメリカ」や、ニューヨークを舞台にしたミュージカル「ウエストサイド ストーリー」などの影響で、漠然とではあるがアメリカという国への関心が高まった。自分としてはもとより、高邁な哲学など持ち合わせるはずもなく、恥ずかしながら、陰気な理二の生物・化学の実験から逃れて、自由の天地アメリカを広くエリアスタディする、教養学科アメリカ科というところは、面白そうだから行ってみようかなと、安易な思いつきで進学したわけである。

中屋先生の「学生と雑巾」や「奴隷教室授業」等の逸話については、諸先輩方が縷々お書きになっておられるが、何も知らずにアメリカ科に飛び込んだ私にとっても、まさに忘れられない、驚きの体験であったので、重複をお許し願ひ書かせて頂く。

まず開講初日、同じく理二出身のI君と一緒に、ほんの1、2分遅れて中屋研究室に入った二人は、全員の前で先生からいきなり「TOO LATE!」と大きな声でどなられ、びっくり仰天(先生が時間には、殊の外うるさいということは、後で知った)。更に分厚いアメリカ史の原書のテキストに加え、アサインメントとして、次回講義に関連する、同じく数100ページはある別の原書が各人別々に渡され、次回までに全部読んで、原稿用紙10枚にまとめたレポートを提出せよとのお達し。しかもこれが今後授業の度に毎回続くと聞かされ、一瞬皆気が遠くなった。

初日の授業終了後、私とI君は「これは無理だ。とても自分達にはついて行けない」と、アメリカ科進学は止めることを決意。それには教養学部2学期後半の必須科目である体育を落とせばいいと、二人して意を決し教務課に駆け込み、「体育を落として留年したい」と直訴した。しかし教務課からは、そんなバ

力な考えは止めなさいと説得され、結局二人とも留年することは諦めた。

中屋先生は当時、「授業中に辞書が飛んで来る」といった恐ろしい壮年期は過ぎておられたものの、まだまだ元気一杯で、毎回厳しい緊張を強いられる授業の連続。このため我々は最初の半年間は、アメリカ史以外の授業はほとんど取る余裕もなく、週2回、火曜、金曜の先生の授業にひたすら専念し、毎回授業の前日は、準備のため全員一睡もしない徹夜であった。



駒場 中屋研究室

授業は縦長の中屋研究室の細長いテーブルに、徹夜明けの9人が緊張した面持ちで座り、窓を背に座る先生のお顔の表情は、逆光のためよく見えない。もともとがっしりした体格で、色の黒い先生の怖い顔は、まるでアメリカインディアンの酋長を彷彿とさせ、いつ厳しい質問が飛んで来るかと、皆戦々恐々の面持ちであった。

最初のうちは、我々が徹夜で提出したレポートには、先生の太い赤鉛筆で容赦ない添削がなされ、3～4点の評定しか付かず返されてきた。それでも日が経つにつれ、分厚い原書を読む要領もだんだんと分かって来て、我々も徐々に授業に慣れ、時々10点も取れるようになった。そして、先生のアメリカ史やアメリカ政治に対する、鋭い指摘と深い洞察力に感銘を受けつつ、なるほどそういうことかと、アメリカ建国200年の歴史についての、我々の理解も深まっていったように思う。

こうして、半年間の厳しいしごきに耐えた翌年の春、我々は待ちに待った「奴隷解放」の日を迎えたのである。あの時のほっとした解放感は今でも忘れられない。その後のアメリカ科での学生生活は、ゆとりも出て来て楽しかった。中屋先生は、「今年は生きのいいのが採れた」と仰って、同期9人に「クラブ・バファローズ」という呼称をつけてくださった。学生の面倒見の良い先生は、休暇になると皆をあちこち連れて行ってくださった。春の安達太良の残雪を踏みしめながらの山歩きや、ひなびた山の温泉に浸かったこと。夏の東大伊豆戸田寮に泊まり、強い陽ざしの砂浜でやったスイカ割りや、たらふく食べた熱いバーベキューの味。秋の紅葉の東北めぐり等々、先生とご一緒した楽しく懐かしい思い出が甦る。



伊豆旅行

アメリカ科卒業後、私は東京銀行（現、三菱東京UFJ銀行）に入社し、しばらくしてニューヨーク勤務の辞令をもらった。5年間のニューヨーク滞在中、私は休暇の度にかつて学んだアメリカ史を思い出しながら、メイフラワー号到着のケーポッド、プリマスから始まり、自由の鐘のフィラデルフィア、南北戦争の激戦地レキシントンやゲティスバーグ、ケネディの眠るアーリントン墓地等々を、3人のまだ幼い息子達を連れて歩き回った。

ある時中屋先生から連絡が入り、授業に使われるとのことで、「合衆国の地図を捜しているが、日本には良いものがない。学生に渡すのに沢山いるんだが、ニューヨークの本屋には良いものがあるだろうから、捜して送ってくれないか」との依頼だった。さっそく私は、マンハッタンの本屋をあちこち走り回って捜したが、意外に手頃で適当なものが見つからず困った。職場にいるベテランのローヤーに相談し、やっと適当なものを見つけて、50部ほど送った。後で先生からは、「良いものを見つけてくれて、ありがとう」とのお返事を頂き、ほっとしたのを思い出す。

バファローズの仲間の結婚式では、メンバーが司会をすることが多かった。その度に筆の立つN君が、新郎新婦の人となりやアメリカ科での失敗談などを、面白おかしく紹介したガリ版刷りの「クラブ・バファローズ新聞」なるものを作ってきて、披露宴の席で皆に配ってくれた。毎回挨拶に立たれる中屋先生が、「手元に配られた『怪文書』は、云々・・・」とバファローズ新聞を引用しつつ、新郎新婦の紹介を辛口ながら暖か味のあるお言葉で話してくださったのも、懐かしい思い出である。

バファローズの面々もとうに古希を過ぎたが、皆いたって元気そのもの。毎年暮れには14期の皆さんも加わって、合同で国際文化会館に集まり、美味しいワインとフランス料理を楽しみながら、半世紀前のアメリカ科学生時代と、中屋先生の懐かしい思い出話に花を咲かせている。

過日は、東京での大学教授生活を退き、福島に隠居したN君を、東北地震の見舞いを兼ねて皆で訪ね、NHK大河ドラマ「八重の桜」の鶴ヶ城や野池温泉を巡る、会津若松の旅などを楽しんだ。今でも大変仲の良い、我々クラブ・バファローズの一人一人には、中屋先生の「よく学び、よく遊べ」の精神がしっかりと生きている。



バファローズ Fukushima 復興支援ツアー (Oct. 18, 2013)